2024年4月28日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

キリストと共に競技を

［コリントの信徒への手紙一9章16～27節］

「もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。自分からそうしているなら、報酬を得るでしょう。しかし、強いられてするなら、それは、ゆだねられている務めなのです。では、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるときにそれを無報酬で伝え、福音を伝えるわたしが当然持っている権利を用いないということです。わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。」

[1]　「自由」―福音の力

 主イエス様を信じるようになった私たちは、様々なとらわれから自由になった者です。先ほどもご一緒に讃美で「あぁ、恵み」と歌いましたけれども、正にキリストの恵み（Grace）と言うのは私たちに安心を与えてくれるものですね。「あぁ、恵み、計り知れぬ恵み、我にさえ及べり」と言える時、この地上の様々なものさしで自分を図る必要はない、私は私でいいのだ、と思えますね。「宗教」と言うと、何か自分を縛る「協議（教え）」や「律法」を守る生活をして神様に相応しい自分になろうとする生活をイメージするかもしれませんが、「福音」はそれと正反対だと思います。主イエス様が私を本当に愛し、愛し抜いて下さって、私を‟滅び”に渡さず、十字架でご自身のその尊い命を献げて下さった。その愛が私たちの心を本当に温かく包んで下さるので、それまで自分が「律法」としていたもの（生き方やこだわりも）、「偶像」としていたものを自然と手放させてくれる、それが「福音」の力だと思います。クリスチャンとは、自由人です。ですから、この「コリントの信徒への手紙―」9章の最初の所でもパウロはまずこう言っています。―「わたしは自由な者ではないか」と。先週の続きで言えば、偶像に供えられた肉を食べることも気にしなくて良い、動物の肉自体が何か悪魔的な力を持つなどということはない、主が清くして下さったものを清くないなどと言ってはいけない、しかし、過去の習慣からどうしても逡巡する新しい信仰者たちもいるので、その者たちを躓かせないためなら、私はもうそのような肉は食べないと言いましたよね。つまりパウロ自身は福音の故に自由な者なのだけれども、それで周りの者たちを裁いたり、言い負かすのではなく、むしろそのような者たちと共に生きようとするのです。福音が広まるために。かつて熱心なユダヤ教徒としてキリスト者を激しく裁いていたパウロは、キリストによって変えられたのですね。

[2] イエスの福音を無償で受けたのだから

 パウロは、この9章の中で自分の伝道者としての‟誇り”を語ります。彼の誇りとは一言で言うなら、「無報酬」でやって行きたいということです。宣教者として報酬を受ける権利は自分にはあると。しかし彼はその権利を用いたいとは思わなかったのです。彼は、自分が関係した教会からの贈り物を頂くということはあったようです。しかしそれを当てにすることはなかった。パウロは、当時貧しい仕事とみなされていたテント造りをしていました。18節で彼はこう語っています。―「では、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるときにそれを無報酬で伝え、福音を伝えるわたしが当然持っている権利を用いないということです。」　私はここを読んで、ああ、いいなあ、これが本当なんだよなぁ、と思いました。もちろん教会からの謝儀と言うのは、牧師にとってとても大切な生活のためのお金であるし、パウロ自身それを頂くのは伝道者としての権利であるとも考えています。しかし、基本的には無報酬で良いのだと言います。どうしてでしょうか？最も大きな理由は、福音というものは、ただ（無償）であるからです。自分もそれを無償で頂いたのだから、見返りを求めないで仕えてゆきたいと。これがパウロの偽りのない思いですね。このことは、私自身にも本当に刺さってきます。特に現代、財政が厳しい教会が増えてきています。世の中全体が厳しい。しかしそうでなくても、本質的に牧師も教会も良く考えなければならないことですね。

　私は今回の準備ために、現代の米国の神学者R・B・ヘイズという方の『コリントの信徒への手紙一 現代聖書注解』（日本キリスト教団出版局刊）を読んでいました。その中に＜牧師、説教者のための黙想＞という部分があるのですが、この部分に記していることにハッとさせられました。―『有給の教職者たちが援助に飼いならされて、援助を提供する者に頼り過ぎていないだろうか。パウロがテント造りをして自活した例は検討してみる価値がある。もちろんパウロのこの方策は、現在でも必須ではない。しかし福音を宣教する使命がある者は誰でも時々立ち止まって問うべきである。「私が宣教するために支払いをしているのは誰なのだろう。そしてそれは私の宣教の内容と誠実さにどんな意味を持っているのだろうか」と』。―本当にそうだと思いました。パウロは福音を伝えることは、仕事というより、主イエスとの関係で神様から「委ねられた務め」（17節）であって、自分は当然の権利である報酬を受けませんと言い切っています。それはパウロの誇りであり、そこに彼の真の喜び・幸いがあるのだと思います。

　その自由を得たものとして、パウロは19節でこういいます。「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷（僕）になりました。できるだけ多くの人を得るためです。」彼は宣教の情熱に満ちています。この言葉は、22節でさらにこう言い換えられています。「弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです」。―「弱い人のようになった」とありますが、その意味は「弱い人になった」です。見せかけのポーズじゃないのです。逆に彼は「強い人になった」という言い方はしません。彼の目の方向は「強い人」ではなく、「弱い立場の人」です。これは彼が十字架の主イエスの生き方である、あの真の謙りから学んだことです。パウロは自分は「キリストの律法」に従っていると言いましたが、それはフィリピの信徒への手紙2章で彼が記したキリストの姿に倣うことなのだと思います。2：6～9をお読みします。有名な言葉です。―「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」。パウロにとって、このイエス・キリストの生きざまというのは決定的だったのです。そして、彼だけではありません。今の私たちにとっても本当にこれは決定的ではないでしょうか。

[3]　福音宣教は、キリストと共に進む 「団体戦」

　パウロはこの章で、「福音のためなら、どんなことでもする」と語ったあと、「自分の体を打ち叩いて服従させる」と言っています。彼はマゾヒストなのか？そんなことではありませんね。そうではなく、私たちのこの人生は、レース、「競技」なのであって、そのレースに参加しているのなら、競技者らしい誇り（プライド）と節制が必要だと言っているのだと思います。彼はここで、コリントで２年おきに行われていたイストミア競技会を念頭にイメージしているようです。それは個人アスリートの競技会であって、勝利者には冠が与えられました。それは枯らしたセロリで作られた冠であって、25節で「朽ちる冠」と表現されています。しかし、私たちはそうではなく、神が下さる朽ちない栄光の冠を得るために生きるのだと言います。それは「救い（義）の衣」と言ってもいいでしょうね。かの日に私たちはそれを主から頂く。だから、映画『炎のランナー』ではありませんが、私たちは、こんな者をも主は捕え、その栄光のための器として下さっているということを信じて、それぞれのレースを走り抜こう！と励ましているのですね。

そして私は、先ほどのヘイズさんが、注解書の中でこんなことを言っていることが心に響きました。これはなかなか私たち教会にとってチャレンジングな言葉だと思います。「この9章24～27節は、私たちは競技に参加できるかという挑戦である。福音について語るだけではなく、犠牲を払って、競技に賞を得るにふさわしいように参加するように呼びかけられている。もしパウロが団体競技を知っていたなら、もっと豊かな比喩を使ったであろう。団体競技者はチームの成功のため利己を抑制し、厳しい訓練に一致して取り組む。説教者は自分のホームチームである会衆に聞いてみると良い。この競技に参加できるか。喜んで福音のために正しい訓練を行うか。チームの人々のために、自己抑制できるか、と」。

「団体競技」、チームプレー。面白いなと思うのは、例えば野球であれば、三つアウトを取られる前にどう攻めるかということですよね。時には自分が犠牲になって（送りバンドとか）塁を進めるということもある。サッカーもやみくもに走る訳じゃなく、パスしながらどうボールを協力してゴールに導くかということですよね。カーリングも、一投一投皆で作戦を変えて行くでしょう。団体戦は柔軟なのだと思います。川越教会も「団体戦」です。個人じゃない。これまでの歴史ももちろん大事。その上で、これからの時代にどう柔軟に対応してゆくか…。そして、補い合って進んで行くことが出来たなら、きっと神様は私たちの教会に将来を与えて下さるに違いないと思います。だって、教会は「キリストの体」ですから。キリストが動き、働いているのです。私たちもそのキリストの働きに参加することが出来る。これは大きな喜びではないでしょうか。お祈りを捧げます。

　神様、私たちは弱い者です。罪人です。しかしあなたは私たちの人生を用いると仰って下さいます。どうか一度きりの人生を、あなたの愛を証して行く器としてお用い下さい。私たちなりの献身が出来ますように。私たちの人生を、また、川越教会をも祝福し、お用い下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。